

光源氏の父子論

―《父殺し》の文学としての『源氏物語』―

原 央子

一 『源氏物語』の父子関係を考える意義

親子関係という縦の繋がりの「―」視点に立つと、光源氏は息子として、父親として、二つの立場をもって物語の中に描かれていることが分かる。『源氏物語』は「女性の文学」と言われるが、本稿は敢えてそれを「男性の文学」として、主人公・光源氏の《克服する息子》と《克服される父親》という両義的な側面を捉える過程を読み、そこに描かれる父子関係の人間の意義を探すことを目指したい。

私が「父子関係」という視点で『源氏物語』を読みたいと考え始めたのは、以前授業で読んだ『オイディプス王』がきっかけであった。フロイトは、この物語を基にして、「エディプス・コンプレックス」という心理状況を男児の心的発達の段階に見出した。『岩波哲学・思想事典』によると、エディプス・コンプレックスとは、「父に代わって母と性的な関係を結ぼうとする無意識の欲望から生ずる観念の複合体」であり、息子が父の欲望を模倣し父と〈同一化〉しようとする過程の中で、次第にその欲望を抑圧して両親とは異なる自身の道を獲得していく、という幼児期の男児の無意識的葛藤の概念である。

これを文学作品の中に見出すとすれば、父・息子間の依存や軋轢等といった様々な関係性を、息子自身が乗り越えていくということ

になるだろう。息子は、《克服する息子》として父への甘え意識や過剰な恐怖を克服し、自身の中に客体としての父を認めてこそ、一人の人間として自立的人生を歩めるのだ。父はそうした息子の殺人願望を受け入れ、自らの《克服される父親》としての役割を全うしなければならぬ。言い換えれば、これは父と息子がそれぞれに主体性を獲得していく過程である。それこそが、人と人との縦の繋がりが、連綿と繰り返す命の営みを滞りなく行うために最も重要な関係ではないだろうか。

『源氏物語』において、果たしてそれらの関係は成立しているのか。物語には、多くの父子が登場する。その中でも本稿では特に、主人公・光源氏の描かれ方を通して、父子関係の中で一人の男性として自立性を手に入れていく過程を見ていこうと思う。後世に多大な影響を与えた『源氏物語』だからこそ、女性中心の物語としてだけではなく、男性を中心として、父子関係を紡ぐ物語として読み解いていくことが必要なのだと考えたい。

なお、本文は『新潮日本古典集成 源氏物語』（石田穰二・清水好子校注、昭和五十一年、新潮社発行）によった〔注1〕。

二 息子としての光源氏

桐壺院・源氏の父子関係において、源氏はどのように描かれるか。源氏の父への殺人願望、《克服する息子》としての描写について考えてみよう。

《葵》巻で、六条御息所の件について父が苦言を呈する場面を用する。

「人のため、はぢがましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の怨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさをきこめしつけたらむ時と、恐ろしければ、かしこまりてまかだたまひぬ。〈葵〉

父の言葉に対して、息子の心情が呼応していないように思えたのは私だけだろうか。何故源氏は「けしからぬ心のおほけなさをきこめしつけたらむ時」のことを考えているのか。「女性の恨みを買うな」という父の忠告は一見息子を諫めるための一般論に過ぎないが、その裏に、桐壺更衣への寵愛に対して周囲の嫉妬を招いた自身の反省を滲ませていることは明白である。源氏は母更衣の死の経緯を聞き知っているので、父の発言を受けてその裏の意図にすぐさま思い当たる。それを読み取った源氏は、すぐに自分と藤壺の関係を思い浮かべるのだが、これは、「母の死」という事件と「父が母を殺した」という事実を思い出し、義母を犯すことによる無意識的な「父への殺人願望」を発露させている証拠ではないだろうか。幼い源氏の中に芽生えた《克服する息子》としての感情は、成長した今なお、確実に息づいているのである。

では、源氏はそれを達成することが出来たのか。その点を言及するために、〈明石〉巻の嵐の場面で、院の靈魂が現れたきっかけについて考えたい。それは、〈須磨〉巻の前半部の記述に見られる。須磨退去を決意した源氏は、紫の上や花散里、朧月夜と別れを惜しみ、そして出発前夜に藤壺の下を訪れる。その足で源氏は、父院の

の中で、源氏は「父」という光を求めているのである。「桐壺院の遺した遺言は消えてしまった」というのは、社会に父の庇護が及ばなくなった、という意味であろう。自らの運命を決しようとする瀬戸際で、源氏が頼ったのは既にこの世にはない「父」であった。遠流を避けるため自身の意志で須磨流謫を決意し、出家をも視野に入れた滅罪の修行を行うために旅立ったと言われる源氏であるが、ここでの彼に「自ら運命を切り開いていこう」という力強さは感じられない。寧ろ、父という過去に縋り、自分の罪さえ忘れ、幼い頃と同じように助けを求めているのではないか。この息子の無上の訴えがあつたからこそ、父院は呼びかけに応え、須磨の浦まで馳せ参じたのであろう。源氏にとって、院は永遠に《自分を庇護する父》なのである。

《克服する息子》としての実相、「父への殺人願望」は、他ならぬ源氏自身の甘えの意識によって達成されなかったのではないか。桐壺院は更衣への盲愛によって彼女を死に至らしめ、その代償行為として自己満足的に「藤壺との代理家族計画」「源氏の徹底的な庇護」を、生涯を通して貫いた。それは、院ただ一人の中で完結する幻想であり、現実では息子に殺人願望を抱かせ、その結果として藤壺事件を引き起こしてしまう。

だが、もう一人の当事者である源氏は、幼児期から青年期に至るまで父に甘えの意識を抱き続け、遂にそれを克服することはなかった。父への殺人願望と畏怖する心を同時に抱きながら、それ以上に父という存在に甘えていたのである。結局のところ、源氏は、《克服する息子》としての役割を最後まで達成することが出来なかった、

山稜に参拝するのである。

御山にまうでたまひて、おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうにおぼし出でらる。(中略) よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはにえうけたまはりたまはねば、さばかりおぼしのたまはせしさまさまの御遺言は、何方か消え失せにけむと、いふかひなし。御墓は、道の草茂くなりて、分け入りたまふほど、いとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立、木深く心すごし。帰り出でむかたもなきこちして、拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。

亡きかげやいかが見るらむよそへつつながむる月も雲隠れぬる 〈須磨〉

「心すごし」とは、索漠とした荒涼感、ぞつとするほどのもの寂しさを表す語であり〔注2〕、まさに源氏の心象風景を描写している。鬱蒼とした森の中、月が隠れてなお一層辺りは暗く、悲しみに胸塞がり帰る道さえ定かでない。そんな中で、生前の父の姿が目の前に突然現れるのだから、鳥肌が立つような不気味さを感じるのは無理はないだろう。ここでは桐壺院は何も語らず、源氏が父への問いかけの和歌を詠んでいる。

「亡き父院は、今の私をどうお思いでしょう、父院と重ねて見ていた月も雲に隠れてしまいました」という和歌は、将来の見通しを失い進退を決めかねている源氏の境遇とも重なる。その暗闇

と推定される。

三 父親としての光源氏

① 夕霧―造り上げられた息子像

では、源氏は自らが父親となったとき、どのように生きたのか。まずは、源氏の長男である夕霧について考察を試みる。夕霧の人間像の特徴としてよく用いられるのは「雄々し」という語である。父である源氏と比較した一例を見てみよう。

かれはただいと切になまめかしう、愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地をし給ふ。おほやけさまは少しははれて、あざれたる方なりし。理ぞかし。これは才のきはもまさり、心用ゐ雄々しく、すくよかに足ひたり、と世に覺えたんめり(藤裏葉)

源氏は物柔らかな美しさを持つ人間であって、人の心を引き付ける魅力があるが、同時に公的には少々碎け過ぎるところもある。それに対し、夕霧は雄々しく男性的であり、真面目で実直堅実な人間である。また、夕霧は「まめ人」として語られることが多く、「まめやか」「まめまめし」等類似した表現が多く用いられているが、これも彼の誠実で重厚な現実的人間像の一端を表している。

一方で、源氏は、夕霧が勉学ばかりで愛情を解しない、堅苦しい人間にならないようにも心を配る。〈初音〉巻において「みづから

のあざればみたるかたくなしさを、もて離れよと思ひしかど、なほ下にはほのすきたる筋の心をこそとどめむべかれ。もてしづめ、すくよかなるうはべばかりは、うるさかめり」と述べているように、多少の好き心を持つていた方が良いと考えている。夕霧が雲居雁をのみ長年恋い慕い、その間恋人としたのは藤典侍ただ一人であったことを踏まえても、夕霧が好き者ではなく、父に望まれたような適度の「ほのすきたる筋の心」を持つていることが分かる。夕霧は、女性に対しても、きわめて誠実な人間なのだとと言えるだろう。

このような夕霧の性格は、偏に源氏の教育の成果と言つて良い。夕霧は光源氏と正妻・葵上との間に生まれた男児であり、源氏にとつては正式に家督を継ぐ存在である。出生と同時に母を失い、長らく母方の祖父である左大臣家に預けられていた夕霧だが、十二歳で元服すると同時に源氏によつて大学進学を課せられた。源氏は自らの経験に鑑み、夕霧を「すぐずくしき公人」にしたい、とその教育観を語っている。

高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。たはぶれ遊びを好みて、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、けしきとりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえて、やむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれて、世おとろふる末には、人に軽めあなづらるるに、かかりどころなきことになむはべる。なほ才をもととしてこそ、大和魂の世

たのは、息子がこの美しさに心を動かされるようなことがあつてはならぬと懸念していたためであつたのか、と了解し、同時に垣間見ってしまったことを何となく恐ろしく思いその場を立ち退いている。この「けはひ恐ろしう」感じた気持ちとは、一体何であろうか。

《少女》巻に「上の御方（紫上）には、御簾の前にだに、もの近うもてなしたまはず、わが御心ならひ、いかにおぼすにかありけむ、うとうとしければ御達なども氣遠きを」とあるように、源氏は二条院時代から見目麗しく成長した夕霧を紫上に近付けさせないよう苦心していた。主だった女房達がよそよそしくなる程他人行儀に扱つたというのだから、余程気を遣つていたのであろう。真面目な夕霧にとつて、父親の計らいは絶対である。そのため、夕霧は目前の紫上の美しさに魅惑されてもお、源氏の命に背いてしまったことへの無意識的な恐怖を拭えなかつたのであり、これ以降も紫上への情念を明確な形にすることはなかつた。夕霧が父に持つ尊敬と畏怖の念、すなわち父から受ける影響力の大きさを物語る表現である。以上の通り見て来た夕霧の人間像について、重松信弘氏は以下のように述べている。

それを一言でいえば、男性的であつて、学問もよくできて、極めてまじめであり、いわゆるよくできた人間である。好き心がないわけではないが、好き者ではない。これは源氏が家紋の栄花頭栄の支えにしたいという希望に沿うて、造型されたもので、源氏を助けて第二部の主題の達成に寄与するが、悪くいえば殆ど源氏の傀儡であり、源氏の意のままの人間になっている。〔注

に用ゐらるるかたも強うはべらめ。さしあたりては、心もとなきやうにははべれども、つひの世のおもしろなるべき心おきてを習ひなば、はべらずなりなむのちも、うしろやすかるべきによりなむ、ただ今はかばかしからずながらも、かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひあなづる人もよもはべらじと思つたまふる（少女巻）

名門の子弟として心のままに高い官職を得ることは可能だが、時勢が移り頼るべき人に先立たれると、それまで追従していた世の人々にも軽んじられる。やはり学問という基礎があつてこそ、政治家としての強みも生まれる、それゆえに将来の世の柱石となるべき心掟を学ばせたい、と言う。父・桐壺院没後の朱雀帝時代、有力な後見を失つたために須磨流謫の憂き目を見た源氏の、自身を省みての言葉であろう。従姉妹の雲居雁との結婚を望んでいた夕霧にとつて、六位という低い位を与えられると同時に、大学での勉学を命じられたことは承服出来ないものであつたが、「おほかたの人がら、まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば（少女）」、父の言いつけ通り学業に励む。

《野分》巻で夕霧が紫上を垣間見たあの事件に、夕霧の人間像がよく表されている。彼はある烈しい野分の吹く日の夕刻、六条院に源氏を、三条の宮に祖母を見舞いに行き、偶然にも端近に寄つていた紫上を垣間見る。風情ある樺椈が咲き乱れるようなその蠱惑的な美しさは、夕霧の心に紫上こそを最上の女性とする深く強い思慕と憧憬を刻み込んだ。そして、父が自分を紫上に近付けさせなかつ

「源氏の傀儡」とは、随分強い表現だが、夕霧が父の教育という敷設されたレールを大きく外れることがなかつたことは事実である。この理想的な息子は、垣間見た継母の美しさに彼女を深く慕う気持ちを生涯忘れることが出来ないが、最終的に《母への姦通》を達成することはない。それは、野分の朝、夕霧が紫上を垣間見たそもその始まりにおいて、いやもつと言えば源氏が夕霧を「まめやか」な男に育て上げた時点で定められていたことであつた。日向一雅氏は以下のように述べている。

この時夕霧にとつて紫上は永遠の理想像として現前したのである。「継母」を永遠の理想像とすることは、光源氏の藤壺に対する思慕と軌を一にする。密通の有無は結果に過ぎないというべきだろう。（中略）可能性としては夕霧にも密通はありえたのであり、それを防止しえたのは源氏の教育と細心の警戒によつていたのである。〔注4〕

すなわち、夕霧による《母への姦通》を阻止したのは、父親としての源氏の教育があつたためであつた。これは、光源氏の目の届く範囲内で、彼の思惑を超える人物が登場することはない、ということの意味しているように思われる。源氏によつて家門繁栄の支えとなるべく教育されてきた夕霧が、父を克服する存在となることは、いったい不可能だったのではないか。そう考えると、父としての源氏を克服するためには、彼の意思の届かぬ、ある意味で不可抗力的な力が働かざるを得ない、と言えるだろう。

② 柏木―源氏のもう一人の息子

源氏には二人の息子がいる。長男夕霧と、そして表面的には明らかにされない息子・冷泉帝である。しかし、《克服する息子》と《克服される父親》という父子関係の中で捉えると、この二人はどちらもその役には適さないように思える。三①で述べたように、夕霧は光源氏によって源家の将来を担う理想的男性像として意図的に作り上げられた息子であるため、父を脅かす存在にはなり得ないからである。また、冷泉帝に対しては、源氏は生涯「父親」としてではなく、「後見人」としての立場を徹した。

では、光源氏の栄華を打ち壊す存在、偉大な父を克服するための《父殺し》の役割を担うのは誰か。私は、それを内大臣の長男・柏木に求めたい。夕霧が《父を殺す》ことの出来ない実直で現実的な人間となったのは、源氏が彼をそのように育てたからであり、夕霧の《母への姦通》の未遂は予定調和とさえ言えるだろう。つまり、源氏を克服するのは、源氏の思惑を超えた力でなければならぬのだ。そこで登場するのが、柏木である。柏木について本文中で触れられるのは、《胡蝶》巻に初めて登場してから《柏木》巻で没するまでのわずか一三年間だが、その短い期間で彼は第二部最大の事件すなわち女三宮事件の中心人物となる。それこそ、彼に「源氏を脅かす存在」としての役割が与えられている証拠と言えるのではないか。本節では、柏木という人間像を明らかにした上で、柏木という登場人物の持つ意義について詳細な考察を加えていくことを目的とする。

も誰もいと思ひやりなきこそ、いと罪許しがたけれ（若菜下）

「思慮深そうに、もの静かに振る舞う様子が人に優れて目立つ」のだが、源氏はそれを「用意あり顔」「静めている様」と、外面的なものとしているのであり、すなわち内面においては思慮分別が足らず、感情的なところがあるのを知っているのだろう。この柏木の二重性について、重松信弘は次のように考察している。

「上べ」だけ「いとようもて静め」ていて、それが実に堂に入っている。甚だ思慮があつて、平静で、会う人も何を思っているのだろうかと、息苦しくなるほどだというから、大したものである。このような平静の外装の奥の心は虚弱であり、「いみじうとも、云々」というように、愛情に溺れて身を亡したのである。源氏は外装の奥の心を「思ひやりなき」と、思慮が足らんと見、夕霧はそれを「弱き所つきてなよび過ぎたり」と、心が弱いと見る。源氏は知性的でないと見、夕霧は感情的だと見るが、柏木の心性は知性的でなくて、感情的なのである。それを冷静で思慮深かそうに外装している。それが実に驚くほど巧妙なので、源氏や夕霧のように密通を知って、彼の心を見抜いた者でない限り、外装にたぶらかされて内面は分からない。〔注5〕

この弱い感情的な心は、柏木の内面に源氏への畏怖の念を抱かせる。彼は「いみじきあやまち」をしてしまったと自覚し、不義の発覚を

第一に、柏木の人物像を明白にすることを試みる。女房達の所見では、

かの君は、五六年のほどのこのかみなりしかど、なほいと若やかに、なまめき、あいだれてものしたまひし。これはいとすくやかに重々しく、男々しきけはひして、顔のみぞいと若うきよなること、人にすぐれたまへる（柏木）

かの大殿は、よろづのことなつかしうなまめき、あてに愛敬づきたまへることの並びなきなり。これは男々しうはなやかに、あなきよらと、ふと見えたまふにほひぞ、人に似ぬや（柏木）

と、夕霧の「すくよかで雄々しい」様に対して、柏木は「なまめいて、あいだれている」と見える。つまり、夕霧は実直で男性的な人間であるが、柏木は柔和で女性的な優しさを持った人間である。

《胡蝶》巻においては、源氏も「公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さるなかにも、いとしづまりたる人なり」として、若い公達の中でも、大層落ち着いた声望ある人物として柏木を評価していた。しかし、女三宮との一件を知った後の源氏は、柏木のまた異なった一面を指摘している。

いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを、いとどしづめてさぶらひたまふさま、などかは皇女たちの御かたはらにさし並べたまふに、さらに咎あるまじきを、ただことのさまの、誰

恐れて外を出歩くことすら出来なくなってしまう。

さてもいみじきあやまちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれと、恐ろしくそらはづかしきこちして、ありきなどもしたまはず。女の御ためはさらにいはず、わがこちにもいとあるまじきことといふなかに、むくつけくおぼゆれば、思ひのままにもえまぎれありかず。（若菜下）

しかし、この源氏への恐れは、言わば柏木自身の作りだした幻影であり、実体を伴うものではない。右記の時点では源氏は柏木と女三宮の密通の事実気づいていないが、彼の苦悩はそれとは無関係に自分の内面的な心の中で既に始まっているのである。この点について、石田穰二氏の柏木論を引用しておく。

柏木の懊悩、畏怖は必然的に彼に死を齎したが、彼の懊悩、畏怖は、何のいはいもないものであった。すなわち彼の死には、外的要因は全く求め得ない。事は全て、彼の精神の世界の必然として起ったのである。

ただ、ジムメルが「運命」(Schicksal)と言ふ時、それは一応ある人間の破滅の外的な原因として考へられてゐる。柏木の場合、それは源氏によって形づくられる筈のものであったかも知れないが、考へたきたやうに、源氏は、彼の死の原因となった限りに於ては彼の外存在ではなく、彼の想念の裡における存在であった。いはば幻影であつたにも等しい。扞格、葛藤は、す

べて彼の内的な想念の場に於て闘はれたのである。〔注6〕

もともと、柏木は「高き心ざし」を持った人であった。父の内大臣はそれを「皇女との結婚」を求める心だと解しているが、さらにその裏には、皇家とのより強い繋がりを望む政治的野心もあっただろう。だからこそ、彼が娶るのは、朱雀院に最も愛される女三宮でなければならなかったのだ。感情的で思慮分別の足りぬ柏木は、この偏狭な一念をのみ強く持ち続け、女三宮が源氏に降下して後はいっそうその思いを募らせている。

しかし、柏木自身、それが「おほけなき心」であることをよく理解していた。彼の恋を語るとき、「おほけなし」という形容詞が多用される。「おほけなし」は「身分不相応で、恐れ多い」という意味を表す語であり、夕霧は自身の紫上への憧憬を「おほけなき心はなかりしかど」と、身の程知らずな恋と呼べる程具体的なものではなかったと述べている。ここで、源氏の妻に対する夕霧と柏木の思慕に同じ語が使われているのは、両者にとつて源氏が同じように權威的な父的存在であり、張龍妹氏の言を借りれば、その寵愛や信頼への「背信が許されない関係」にあったことを示しているのではない。そしてその「おほけなき心」に柏木が捕らわれた一方で、夕霧が紫上への思慕の感情を「おほけなき心」にしなかった、という点で、彼らの息子的役割の違いを表しているのだ。

つまり、柏木は自分の「高き心ざし」から生まれた恋心の中に、潜在的な源氏への畏怖を自覚しており、その「おほけなき心」が父に等しい存在から寄せられていた信頼への重大な裏切り行為であ

慕「女三宮との密通」という、源氏への対抗的立場を取っているものの、各々一人で光源氏を《克服》するには至らない。したがって、私は以下のような仮説を立てることを試みたい。すなわち、夕霧と柏木はお互いに影響を与え合い、《克服する息子》的役割を分担しているのではないか、という論である。

《若菜下》巻に、それを裏付けるような場面がある。六条御息所の死霊に取り憑かれた紫上は一度息を引き取るが、その後蘇生した直後に見舞いのため二条院を訪れた柏木は、泣き騒ぐ屋敷の様子に驚き、涙しながら現れた夕霧に現状を確認しようとする。

「いと重くなりて月日経たまへるを、この暁より絶え入りたまへりつるを、もののけのしたるになむありける。やうやう生き出でたまふやうに聞きなしはべりて、今なむ皆人心しづむめれど、まだいとたのもしげなしや。心苦しきことにこそ」とて、まことにいたく泣きたまへるけしきなり。目もすこし腫れたり。衛門の督、わがあやしき心ならひにや、この君の、いとさしも親しからぬ継母の御ことを、いたく心しめたまへるかな、と目をとどむ。《若菜下》

柏木は、夕霧の取り乱す様子に、「さして交流もない継母をひどく気にかけていることだ」と目を留める。彼は、夕霧の紫の上への密かな想いを見抜いていたのであるが、それは自分の許されざる恋心から推し量られたものであった。

また、夕霧も柏木の密通に勘付くことを思わせる場面もある。重

ることも充分理解していたのである。それは、彼が「なめしと心置いたまふらむあたりにも、ありともおぼしゆるいてむかし、よろづのこと、今はのとちめには、皆消えぬべきわざなり」と、死を持つてしかこの罪を償うことが出来ないと考えていたことから伺えるだろう。柏木は、源氏からの怒りそのものを恐れたのではなく、源氏の信頼を裏切った自分の行為に対しての畏怖を抱いているのである。

しかし、そもそも源氏が柏木と女三宮の密通を知った朝、一番最初に描かれるのは、そのような文を人目に触れるところに置いておいた女三宮の不注意さに「心劣りして、さればよ、いとむげに心にくきところなき御ありさまを、うしろめたしとは見るかし」と思う心である。さらにその後、源氏はその文を見返して、柏木の迂闊さに「あたたら人の、文をこそ思ひやりなく書きけれ」「人の深き用意は難きわざなりけり」という感想を持っている。評価を下げたとは言え、「せつかくの柏木ほどの人物が迂闊な手紙を書いたものよ、用心深くするということはなかなか出来難いことだ」とは、何とも冷静な視点である。このときの源氏の心情は後の第四節で詳しく考察するものとして、ここでは柏木の苦悩が実際の源氏に即したものは無い、ということに注目しておきたい。すなわち、柏木は《克服する息子》的役割半ばにして、自身の作り出した過剰な畏怖の心のために、自ら破滅へと向かっていったのである。

③二人の《息子》が成し得たこと

三①・②で見たように、夕霧と柏木はそれぞれが「紫上への思態の柏木を見舞い、「この御こちのさまを、何ごとにて重りたまふとだに、え聞きはべらず」と、病が重くなつた原因をそれとなく尋ねる夕霧に、柏木は次のように答えている。

また心のうちに思うたまへ乱るることのはべるを、かかる今はのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを、誰にかは愁へはべらむ。(中略)六条の院にいささかなることの違ひめありて、月ごろ、心のうちにかしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の樂所のこころみの日参りて、御けしきを賜はりしに、なほ許されぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえはべりて、あぢきなう思うたまへしに《若菜下》

ちよつとした行き違いのために源氏の怒りを買ひ、なお許して貰えぬようなので、もう生きていくことが出来ない、という。兄弟にも打ち明けられぬこの告白を受け、柏木が女三宮に執心していたことを知っている夕霧は、「心のうちに思ひ合はすることどもあれど」と、すぐに事情に思い当たる。さらに、このことを源氏に話してその顔色を窺ってみたいと思う。そして後に生まれた薫を見る頃には、完全に柏木の息子という認識を持つてその面立ちを眺めているのである。

なま目とまる心も添ひて見ればにや、眼居など、これは今すこし強うかどあるさまさりたれど、まじりのとぢめをかしうかをれるけしきなど、いとよくおぼえたまへり。口つきの、ことさらにはなやかなるさまして、うち笑みたるなど、わが目のうちつけなるにやあらむ、大殿はかならずおぼし寄すらむと、いよいよ御けしきゆかし。〈横笛〉

何となくそう思つて見るせいか、眼差しやすつきりと美しい目尻が柏木に大層よく似ている。口元が特別華やかな感じに、につこりと笑うところ等、自分の思い違いなのだろうか、源氏は必ず気付いているだろうと、ますます心中を聞いてみたくなる。直前に勾宮等他の皇子達と夕霧が無邪気に戯れていた様子が描かれており、幼い薫に亡き親友の面影を認めて複雑な思いで見つめるこの場面は、それとひどく対照的である。夕霧の心中に即した書き方も、夕霧ただ一人が密通の秘密に気付いている、ということ強調するものだろう。以上見てきたように、夕霧と柏木ははつきりと事情を話さぬまでも、お互いに罪を察し合う関係にある。すなわち、この二人は息子的役割をそれぞれが分担しながら、かつそれを互いに察し合う、という《罪の共有関係》にあると言えるのではないだろうか。高木和子氏は以下のように述べている。

夕霧は、柏木の女三の宮への思慕をうすうす察して、その成り行きを心配しながら、そつと見届ける観察者であつた。と同時に、柏木は、光源氏の妻への思慕を心に秘めた身だから、ふとした瞬間に、夕霧の心に潜む紫の上への憧れを嗅ぎ取つてしま

れ。衛門の督心とどめてほほままる、いと心はづかしや。さりともしばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いはえのがれぬわざなり」とて、うち見やりたまふに、人よりけにまめだち屈じて、まことにこちもいとなやましければ、いみじきことも目もとまらぬこちする人をしも、さしわきて、空酔ひをしつつかくのたまふ〈若菜下〉

「寄る年波に勝てず、酒を飲むとつい泣きたくなってしまう。衛門督が私を見てにやにやしているが、そうしていられるのももう暫くのことですよ。老いは逃れられないものだから」と、酒に酔つた振りをしながらわざと柏木を指して言う。こんなにも態度が変わってしまったのは、目前で舞われた童舞がきっかけだろう。舞には、美しく着飾つた夕霧の息子達も参加している。自分の孫の成長した姿を見て、源氏は自らの老いをふと感じ、そして生まれてくる次の孫、すなわち柏木と女三宮との子のことを思い出したのではないだろうか。不義の子のことを考えると、源氏はますます若い二人の過ちを許せず、思わずこんな嫌味が口を付いたのだ。

だが、本来柏木はそれ程に非難されるべきではない。柏木からの文を見つけた源氏は、そのような人目に付くところに文を置いておいた女三宮に、見下されているかのように感じ、「いとむげに心にくきところなき御ありさまを、うしろめたしとは見るかし」と、たしなみ深いところのない女三宮のことを常日頃から頼りないと思つていたことを明かしている。つまり、女三宮自身にもこの事件を招くきっかけがあつたことを、源氏もよく分かっているのである。

う。夕霧と柏木の関係は、ライバル関係というよりは、互いの中に互いの影を見る共犯者に近い。〔注7〕

柏木が夕霧を告白の相手に選んだのは、夕霧の中に自分と同じ源氏への克服願望、紫上への内密な思慕の感情を見出したからであつた。ここに柏木の、お互いの罪を共有したい、という無意識的欲求がある。夕霧はこの意志を受け継ぎ、柏木の事情を把握した上で、父・源氏の対応を見つめている。この過程をもつて、二人は《克服する息子》的役割を分担した、と言うことが出来るのではないだろうか。

④《克服される父親》としての源氏

さて、源氏にとつて夕霧の紫上垣間見、柏木女三宮事件はどのような意味を持っていただろうか。それは、それぞれの事件の結末への源氏の対応に見ることが出来るだろう。

文を発見した後、源氏を恐れた柏木はしばらく六条院から遠ざかる。二人が再会するのは、朱雀院五十の御賀の試楽が行われた十二月のことであつた。躊躇しながらも楽の指導をするためにやつて来た柏木に、源氏は、夕霧と比べて柏木の心遣いの細やかなこと、楽の才があること等を褒め上げ、打ち解けた様子で準備を頼む。その様に、柏木は「うれしきものから、苦しくつましくて」と、喜びと畏怖を入り交えて相対している。

だが、試楽・童舞が無事行われ、日も暮れた中で酒を飲む源氏は、先程とは打って代わつて、柏木に露骨な当て擦りの発言をしている。

「過ぐる齡に添へては、酔ひ泣きこそとどめがたきわざなりけ

そもそも、柏木の言うように「さてもおほけなき心ありて、あるまじきあやまちを引き出で」た例は昔の世にもあり（古注は『伊勢物語』六十五段 業平と二条の后との恋を引いている）、また后妃を犯したわけでもないのだ。同じ記述は、これより前にも書かれている。

帝の御妻をも取りあやまちて、ことの聞こえあらむに、かばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ、苦しくおぼゆるまじ〈若菜下〉

女三宮は「帝の御妻」ではなく、ただ人の妻である。極端に言えば、夕顔や空蟬と源氏の関係もそう変わらないのである。しかし、源氏自身は柏木女三宮事件を、そうと見ることは出来なかつた。何故なら、源氏にとつてこの事件は、二人の若者によつて自身の面目を潰された、という憤懣を起こさせる以上のものではなかつたからだ。柏木の手紙を点検し「うちうちの心ざし引くかたよりも、いつくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、かかることはさらにたぐひあらじ、と、爪弾きさせられたまふ」、すなわち、紫上以上に正妻として丁重に扱つてきた女三宮にこのような仕打ちをされたことを強く非難したい気持ちである、とあるのは、源氏が、自分の愛情への裏切りそのものよりも、恥をかかされたことに對して怒りを覚えている描写である。それは、柏木風情の若輩に六条院という自身の権力世界を踏みじられた、という怒りではなかつたか。そして、女三宮が男児を出産したという報せを受けた源氏は、「さてもあやしや、わが世とともに恐ろしと思ひしことの報いなめ

り」と、これを藤壺事件の応報だと考えることで、説明を付けようとしている。日向氏は、

応報は源氏の思念がそこに宿業の報いを認めるほかないという地点にたどりついたところで自覚されるのであった。人生を宿業として形象する方法は、罪と罰を事件として照応させることではなかった。その照応の中に宿業を見るほかないような人生の形象をめざしたのである。(中略) 女三宮の立場に立てば密通は事故でしかなかったはずだし、柏木とて「愛も主体性も欠いた女の身体」、「空虚な肉体を抱いたに過ぎない」はずであったのだが、それを事故と解することなど思いもよらず、宮が自分をさし置いて柏木に愛を分け与えたと信じる源氏は、知らず知らずのうちに、この事件をかつての藤壺との間の互いの愛に基づく過ちと同一視していたのである。〔注8〕

とした上で、

もし事件として源氏の犯しに対する最も正確な応報を構えるとするれば、夕霧が紫上と密通することではなければならないはずである。応報はあくまで原意の内面の問題としてあったのである。事件としての正確な照応によって応報が成立するのではなく、藤壺事件を投影しないではすまされない地点に源氏を立たせ、かれに「報い」を痛感させたこと、そのように応報を内面化したところに源氏の宿業の人生が現実化したのである。〔注9〕

と述べている。確かに、より正確な応報関係を描くには、柏木ではなく夕霧と紫上を密通させた方が良い。だが、物語はそのような単

明け方の光の中で、紫上の死という終焉を迎えたのだった。それは夢の中の出来事のように、まるで現実感がないものである。しかし、夕霧はこの状況においても、なお理性を失うことがない。夕霧が紫上の死を悼みながら、「人目にはさしも見えじ、とつつみて」いる、という記述がある。彼は紫上という理想の女性像を失いながらも、その気持ちを他人に悟られることのないよう、人目を憚って深く悲しむ様子を表に出さないよう注意しているのだ。

第三節に述べたように、これは夕霧のまめましい性格が一つの原因だろう。だが、それだけではない。夕霧は、自ら《母への密通》を行わない、という選択をしているのだ。それは、〈柏木〉巻、柏木の遺言を受けた夕霧が親友の死の事情に思いを巡らす場面に見ることが出来る。

いみじうとも、さるまじきことに心を乱りて、かくしも身に代ふべきことにやはありける、人のためにもいとほしう、わが身はいたづらにやなすべき、さるべき昔の契りといひながら、いと軽々しう、あぢきなきことなかりかし(中略)、さるべきついでなくて、院にもまだえ申したまはざりけり。さるは、かかることをなむかすめしと申し出でて、御けしきも見まほしかりけり(柏木)

どんなに切なくても、道に外れた恋に心を苦しめてこのように命に代えて良いことがあるだろうか。相手の人にとっても不都合で、我が身は滅ぼすという事で良いものだろうか。これもそうなる前世

純な構図を取らなかった。源氏にとって、柏木女三宮事件は、「自身の権力の衰えを痛感させ、藤壺事件の応報を見出させる」意味を持っていたのである。

では、一方、夕霧の垣間見はどのような結末を迎えたか。〈御法〉巻、病に臥せていた紫上が源氏や秋好中宮と唱和し、遂に死去する場面である。死は誰にでも訪れるものとは言え、六条院全体が言い表されぬ程の深い悲しみに包まれていた。夕霧を初めて母屋の中に入れ、紫上の落飾を命じる源氏の様子を、息子は「心強くおぼしなすべかめれど、お顔の色もあらぬさまに、いみじく堪へかね、御涙のとまらぬを、ことわりに悲しく」見ている。そして、あの野分の日以来夕霧の心に芽生えた、「紫上をもう一度見たい」というほのかな願いを叶えるのである。

むなしき御骸にても、今一度見たてまつらむの心ざしかなふべきおりは、ただ今よりほかにいかでかあらむ、と思ふに、つつみもあへず泣かれて(中略)、御几帳の帷を、もののたまふまぎれに、引き上げて見たまへば、ほのぼのと明けゆく光もおぼつかなければ、大殿油を近くかかげて見たてまつりたまふに、飽かずうつくしげに、めでたうきよらに見ゆる御顔のあたらしさに、この君のかくのぞきたまふを見る見るも、あながちに隠さむの御心もおぼされぬなめり。〈御法〉

この後、夕霧は「いにしへの秋の夕のこひしきにいまはと見えし明けぐれの夢」という和歌を詠む。野分の日夕暮れの思慕は、淡い

からの因縁とはいいいながら、いかにも身分柄を弁えぬ、つまらぬことだ。夕霧自身も紫上を慕っているが、彼は「さるまじきこと」に身をやつしたりはしなかった。そして、父にこのことを尋ね顔を伺ってみたいと思う一方で、今はそのときでないと適当な機会を待っているのだ。彼は親友の死や父の醜聞に、冷静な視線を持って相対しているのである。夕霧は理性的な人間であり、父への畏怖と尊敬の感情を持っている。だが同時に、夕霧は父を一人の人間として客観的に見ているのである。それは、夕霧が源氏に対し《克服する息子》として機能した証だろう。しかしそれは、夕霧一人で達成されたわけではない。彼は柏木の内心を明かされることによって、事件の当事者達と読者しか知らなかった事実を察することによって、《父を殺し》、冷静な視点で事件を見つめることが出来たのだ。夕霧は、紫上の死を「見る」ことによって、自らそのプラトニックな恋路を終わらせたのだろう。

そして父・源氏は、あれ程までに母屋に近づかせないよう心を配っていた夕霧を、御簾のうちへと入れ紫上の死に顔を見せている。これを、源氏の茫然自失ゆえの失敗と見ることも出来るだろう。しかし、私にはこれこそ、源氏が夕霧という息子の存在を認め、《克服される父親》としての自分を受け入れたことを象徴する場面であると思われる。彼は、最愛の妻の死とともに悼む相手として、そして死してなお一層際立つその美しさをともに賞玩する相手として、夕霧を選んだのだ。その選択が、自らの心折れた姿を、《克服される父親》としての自分を、夕霧という息子の目に晒すことと同義だというのは、源氏自身よく分かっていただろう。それにも関わらず、

息子にまるで誇示するかのように亡き妻の美しさを、そして自身の弱さを見せる。父のこの選択によって、夕霧は一人の主体的人間となり、真の意味で《克服する息子》としての役割を成し遂げたのだ。

源氏が《克服される父親》として物語の中で機能しているのは、源氏自身がそれを認めたからというよりも、彼の意図せぬうちに夕霧の《克服する息子》的役割を達成させていたためだと思われる。柏木と女三宮の過ちは、源氏の内面に六条院の権勢が翳りを見せ始めたという現実を突きつけたが、彼はそれを過去の過ちの応報として捉えることで自身を納得させようとする。しかし、紫上の死とともに、源氏は自らの時代が目の前で終わるのを見た。そして、最早否定する必要のなくなった《克服される父親》としての自分を受け入れたのである。それが、柏木女三宮事件と夕霧の垣間見の結末であり、光源氏という父親の終着点だったのではないだろうか。

四 父子関係における光源氏の自己意識

ここまで光源氏を中心として『源氏物語』における父子の関係を見てきたが、そのまとめとして、ここでは、父子関係の中で源氏がどのように自己を理解していたかを考えたい。

第一節で見てきたように、源氏は桐壺院に甘えの意識を捨て切れずにいるが、二人の父子関係が、最も明確に問題化されるのは、冷泉帝誕生の場面だろう。

あさましきまで、まぎれどころなき御顔つきを、おぼし寄らぬ

されるものだろうか。直後に「わが身ながら、これに似たらむはいみじういたはしうおぼえたまふ」という表現も、この場においては不遜とも言える源氏の心情の一部を述べており、父に対しての申し訳なさや息子への喜ばしさだけではないことを示している。胸中で様々な思いが交錯し、源氏自身、自分の子を慈しむ父に対してどのような感情をもつて接すればいいのか、戸惑っているのだろう。そして、その混乱の中で出した源氏が結論は「あはれなり」という愛情や感慨、悲哀等を詠嘆的に全て表すものであった。それが、「涙おちぬべし」という心内語表現に繋がっているのである。

さてこの時、桐壺帝は、源氏と藤壺の密通の事実気付いていたのだろうか。この点に関しては古来より意見が分かれるところであるが、物語は多くを語らず、真相は未だに定かでない。だが、桐壺帝の人間像、性格、息子を溺愛していたこと等を鑑みると、源氏を責めるような辛辣な言葉をかけることは不自然に思われる。父帝は、そのように息子に接する人物ではない。

ここで、〈明石〉巻での院の亡霊との邂逅のときのことを考えよう。当時の浄土思想をまとめた『往生要集』によると、死んだ靈魂は、過去や現在の事象を全て把握し、生きている人々の心の中まで見通すことの出来る神通力を得る、と考えられていたらしい。ならば、あの世で源氏を見守っていた故院は、当然藤壺事件の顛末と冷泉帝誕生の秘密を知っていたに違いないだろう。しかし、父は息子の罪について一切触れることなく、優しく源氏を導いている。これは、院が息子の過ちを受け入れ、《克服される父親》としての自分を受け入れた、ということではないだろうか。血が受け継がれてい

ことにしあれば、あたらびなきどちは、げにかよひたまへるにこそは思ほしけり。いみじう思ほしかしづくこと限りなし。
(中略)「御子たちあまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いとちひさきほどは、皆かくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじうつくしと思ひきこえさせたまへり。中将の君、面の色かはるこちして、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつるふこちして、涙おちぬべし。〈紅葉賀〉

桐壺更衣の代償として家族の構図に入れられた藤壺を犯すことは、まさしく《母への姦通》であり、二人の間に子が生まれたことは桐壺帝が《克服される父親》という立場になったことの象徴に他ならない。桐壺帝に抱かれた若宮は呆れるほど源氏に似ているのだが、父帝は思いも及ばず、「皇子の中でも源氏だけは幼児期から見ただので、その頃が思い出されるせいだろうか、この宮は本当に源氏に似ている」と、若宮を大層可愛がる。《桐壺》巻から幼い源氏が抱いてきた、無意識的な「父への殺人願望」は、遂に成就したのである。この悲願達成に対して、源氏の反応はどうか。「そなたによく似ている」と言われたときの源氏の心境は、「おそろし」「かたじけなし」「うれし」「あはれなり」という種々の感情が入り乱れている。新潮日本古典集成の頭注によると、「おそろし」「かたじけなし」は父帝に対して、「うれし」「あはれなり」は生まれたばかりの我が子に対しての感情、とあるが、果たしてそのようにはつきりと区別

くために、父は息子に、古いものは新しい世代に克服されていく。「帝」という立場から自由になった桐壺院は、「父」として、源氏の藤壺密通、すなわち源氏の《父殺し》を認めたのだろう。死者は生者と連続し、祖霊として子孫を庇護しその家系の繁栄を助けるものである。息子の生存を助ける、という故院の祖霊的役割には、このような意図があったのではないか、と私には思われるのだ。

しかし源氏は、そのようには考えない。桐壺帝が若宮を抱き自分に「いとよくこそおぼえたれ」と声をかけた、あの〈紅葉賀〉巻の場面において、父帝は既に密通の事実気付いていたのだ、と考えるのだ。

故院の上も、かく御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、思へばその世のことこそは、いと恐ろしくあるまじきあやまちなりけれ、と、近き例をおぼすにぞ、恋の山路は、えもどくまじき御心まじりける〈若菜下〉

先程述べた通り、桐壺帝は冷泉帝を抱いた当時、藤壺と源氏の密通については何も知らなかったであろうと思われる。しかし、自らの中に応報を見出す源氏にとって、あの時の桐壺帝の「知らず顔」こそが、父の最大の優しさであり、自らの過ちに対する答えだったのだ。それは、妻と息子に裏切られ、その不義の子を慈しまなければならぬというアイロニーを抱えながらも、二人を責めることもせず、その苦しみを生涯誰にも明かさずに自分の中に留め置くことである。今の源氏にとって、桐壺帝はまさしく聖人、偉大なる父に思

えたのだろう。源氏は、自分が妻を他の男に犯されるという父帝と同じ境遇に立たされて初めて、その苦悩に思い当たるのである。

そして、結局源氏はその父の答えを、同じく自身の柏木への答えとする他ないのであった。《横笛》巻で夕霧は、落葉宮から柏木の形見の笛を貰い受けるが、その夜、夢に現れた柏木に「笛竹に吹き寄る風のことは末の世長きねに伝へなむ 思ふかた異にはべりき」、すなわち「笛の相伝は我が子に」と希望される。これに頭を悩ませた夕霧は六条院へと赴き、薫に柏木の面影を認めると、機会を見計らって源氏にこの夢の話をする。それは勿論、柏木女三宮事件に思い当たることもあつたのであつたが、源氏はそれすらも承知した上で、「その笛はここに見るべきゆゑあるものなめり」と自ら笛を預かる。そして、夕霧はかねてから聞きたいと思つていた柏木の遺言の件を、父に尋ねてみるのであつた。

「今はとせしほどにも、とぶらひにまかりてはべりしに、亡からむのちのことども言ひ置きはべりしなかに、しかしかなむ深くかしこまり申すよしを、かへすがへすものしはべりしかば、いかなることにかはべりけむ、今にそのゆゑをなむえ思ひたまへ寄りはべらねば、おぼつかなくはべる」とのたまへば、《中略》さればよ、とおぼせど、何かは、そのほどのことあらはしのたまふべきならねば、しばしおぼめかしくて、「しか人の怨みとまるばかりのけしきは、何のついでにかは漏り出でけむと、みづからもえ思ひ出でずなむ。《中略》」とのたまひて、をさをさ御いらへもなければ、うち出で聞こえてけるをいかにおぼす

氏の《克服する息子》《克服される父親》としての自意識は、最後まで現実とはかけ離れたものだった、と結論付けたい。

五 終わりに

桐壺帝は、息子を徹底的に庇護する父親であり続け、彼が《克服される父親》としての自身を受容したのは死んだ後のことであつた。光源氏はそれに気付くことなく、父に甘える息子として、とうとう《克服する息子》の機能を果たすことがなかった。時を経て、《克服される父親》の立場となつた源氏は、夕霧・柏木という二人の《克服する息子》に自身の衰えを見せつけられ、彼はそれに自分の過去の過ちの応報を見出す。しかし、彼が本当に息子の《父殺し》を受け入れたのは、紫上の死を通じて、夕霧に自身の弱さを見せたときであつた。桐壺帝、光源氏、夕霧・柏木、という三世代間の父子関係は、夕霧が主体的人間として自立した眼差しで父親を見ることによつて、初めてその《克服》を成立させたのではないだろうか。そしてそれは同時に、源氏にとつても、《克服される父親》としての自分を認めた瞬間であつた、と言えるだろう。

光源氏の人生の結論として、彼が物語で最後に描かれる場面を見たいと思う。《幻》巻において、紫上を失つた悲しみ深く、一年をかけてその思いを追慕し、同時に昇華させていった源氏は、俗世を捨て遂に出家の道を選ぶ。

その日ぞ出でゐたまへる。御容貌、昔の御光にもまた多く添ひて、ありがたくめでたく見えたまふを、この古りぬる齡の僧は、

にかと、つつましくおぼしけりとぞ《横笛》

「柏木の臨終に、源氏に対して深く申し訳なく思っていることを是非伝えてくれるように、と返す返す頼まれたのだが、その理由が思い付かないのです」と問うて来る夕霧に、源氏は「やはり知っているのだな」と思うが、それを口に出すことは出来ない。「そのような、人に恨まれる態度は、いつ見せたものやら、自分でも全く思い当たらない」と、「知らず顔」を作り、ろくろく返事もしなかつた。これこそが、源氏の柏木と夕霧への《克服される父親》としての最終的な答えだろう。源氏は、柏木への失望や怒り、女三宮の稚拙さを非難する気持ち等様々に悩みながら、父と同じ道に生きることを、この苦しみを自身一人の胸の中に抱えて生きること、選択したのである。それが、自分の受けた「父帝の優しさ」に対する報いだと、彼は考えたのだろう。そう行動せざるを得なかつたのは、第三章第四節で述べた通り、源氏が自らの内に応報思想を作り上げていたからであつた。

父院が「知らず顔」をしたのは、冷泉帝を抱いたときではなく、須磨での夢に現れたときだつた。それこそが、父院が《克服される父親》として機能した瞬間なのだが、源氏はその事実には思い当たらない。彼は、父の「優しさ」という錯覚を自らの内で作り出し、それを因果と考えて、柏木と夕霧に対しても同じ答えを示した。それが、源氏の父子関係の結論である。しかし、実際に彼が《克服される父親》になつたのは、紫上の死を通じて、夕霧に《克服》される自身を受け入れたときであり、それはもつと後のことである。光源

あいなう涙もとどめざりけり《幻》

その日、初めて源氏は表にお出でになつた。その容姿は、昔の光り輝く美しさの上にさらに一段と加わつて、この世のものとは思えぬ美しさである。年老いた導師は、わけもなく涙も抑えられないのであつた。この源氏の描写には、「父に甘える息子」としてでも「息子を恐れる父親」としてでもない、自身の生を生きる、一人の人間の確固とした主体性が感じられる。だからこそ、日の光のもとに自身を晒す源氏の姿が、それを見る導師に理由のない涙と深い感慨を起こさせるのであろう。光源氏が、長い生涯の最後に辿り着いたのは、人間としての内面的な光、自立した人間としての揺るぎない精神だつたのではないだろうか。『源氏物語』とは、一人の男性の精神が、円熟し豊かさを獲得していく物語である、と結論付けたい。

引用文献

〔注1〕 石田穰二・清水好子『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社昭和五十一年）

〔注2〕 鈴木一雄他『源氏物語の鑑賞と基礎知識②』（至文堂 二〇〇一年）

〔注3〕 重松信弘『源氏物語の人間研究』笠間書房 一九八〇年

〔注4〕 日向一雅『源氏物語の主題「家」の遺志と宿世の物語の構造』

桜楓社 一九八三年

〔注5〕 注3に同じ。

〔注6〕石田穰二「柏木の死について―悲劇的なもの―」『源氏物語論集』桜楓社 一九七一年

〔注7〕高木和子『男読み 源氏物語』朝日新聞出版 二〇〇八年

〔注8〕注4に同じ。

〔注9〕注4に同じ。

参考文献・文献

- ・玉上琢彌『源氏物語評釈 第九卷』角川書店 一九六七年
- ・石田穰二「柏木の巻について」『源氏物語論集』桜楓社 一九七一年
- ・多屋頼俊「源氏物語の罪障意識」『源氏物語講座 第五卷 思想と背景』有精堂出版 一九七一年
- ・鈴木日出男「主人公の登場―光源氏論(1)―」(秋山虔他編『講座 源氏物語の世界(第一集)』有斐閣 一九八〇年)
- ・柳井滋「宿世と霊驗」(秋山虔他編『講座 源氏物語の世界(第三集)』有斐閣 一九八一年)

閣 一九八一年

・吉岡曠「柏木の密通と発覚」(秋山虔他編『講座 源氏物語の世界(第六集)』有斐閣 一九八一年)

・小町谷照彦「紫の上愛別」(秋山虔他編『講座 源氏物語の世界(第七集)』有斐閣 一九八二年)

・小町谷照彦「幻」の方法についての試論―和歌による作品論へのアプローチ―(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年)

・秋山虔編『別冊國文學・源氏物語事典』學燈社 一九八九年

・田辺聖子『源氏物語』の男たち』岩波書店 一九九〇年

・山中裕・鈴木一雄編『国文学解釈と鑑賞別冊 平安時代の文学と生活 平安時代の生活と信仰』至文堂 一九九二年

・倉田実「紫の上の死と光源氏―御法巻―」(今井卓爾他編『源氏物語講座 第三卷 光る君の物語』勉誠社 一九九二年)

・増田繁夫「高麗の相人の観相」(王朝物語研究会『研究講座 源氏物語の視界2 光源氏と宿世論』新典社 一九九五年)

・日向一雅「宿世の物語の構造―桐壺帝と光源氏」(王朝物語研究会『研究講座 源氏物語の視界2 光源氏と宿世論』新典社 一九九五年)

・藤井貞和『源氏物語論』岩波書店 二〇〇〇年

・上原作和編『人物で読む『源氏物語』第一巻―桐壺帝・桐壺更衣』勉誠出版 二〇〇五年

・張龍妹『源氏物語の救済』風間書房 二〇〇八年

・熊谷義隆「少女巻から藤裏葉巻の光源氏と夕霧―野分巻の垣間見、そして描かれざる親の意志―」『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店 二〇〇七年

・中村幸彦他編『角川古語大辞典』角川書店 一九八二年

・廣松渉他編『岩波 哲学・思想事典』岩波書店 一九九八年